

絵葉書にみる生田神社・湊川神社

福井 真奈美

1 はじめに

街の中心部に位置する生田神社と湊川神社は、神戸の名所として知られており、市民はもとより、外国人観光客の参詣も多い。

絵葉書は、私製はがきの使用が認められた1900（明治33）年に誕生した。各地の景勝地を写した絵葉書は観光土産として人気を集めていた。当時の絵葉書は情報を伝えるメディアとしての役割を担っていたが、近年ではその記録性が注目されている¹⁾。ここでは絵葉書を史料とし、生田神社・湊川神社の明治から昭和初期にかけての姿をたどってみる。

2 生田神社について

2-1 生田神社の歴史

生田神社は、創祀より1800年以上と伝えられる歴史ある神社である。創祀については日本書紀にも記されており、また延喜式神名帳に名を残す式内社ともなっている。古代、神領で神社を支えていた家のことを「かんべ」（神戸）といい、神戸の地名は生田神社の「かんべ」に由来すると伝わる。

生田神社は、201年、神功皇后により布引の滝付近にある砂山（いさごやま／現在の丸山）に祀られたことが始まりとされる。799（延暦18）年の大洪水により砂山が崩壊したため、現在の地にうつされたとあり、その様子を物語る伝説には次のように記されている²⁾。「大洪水で神域が崩れそうになったとき、生田郷の住人であった刀弥七太夫が馳せつけ、濁流の中御神体を背負い（中略）安全な場所を探し歩いていた。生田の森に差し掛かったとき御神体が急に重くなり一歩も進むことができなくなったため御神慮と察しここに鎮座された」

また、『六甲山災害史』には「延暦18年（799）4月9日、山城河内摂津等大洪水あり、西谷山崩れる」との記録が確認できる³⁾。また生田神社が山津波をうけるとも記されている。砂山の南に位置する神戸市立雲中小学校の北西角には「旭の鳥居」と呼ばれる高さ約3mの鳥居がある（写真1、2）。生田神社が砂山に祀られていたころの鳥居ではないかと語られている⁴⁾。

生田の森は、中世に何度も合戦の舞台になっており、境内にもその史跡が多く残されている。「平家物語」や「太平記」、



写真1 昭和4年以前の朝日の鳥居
(神戸市文書館蔵)

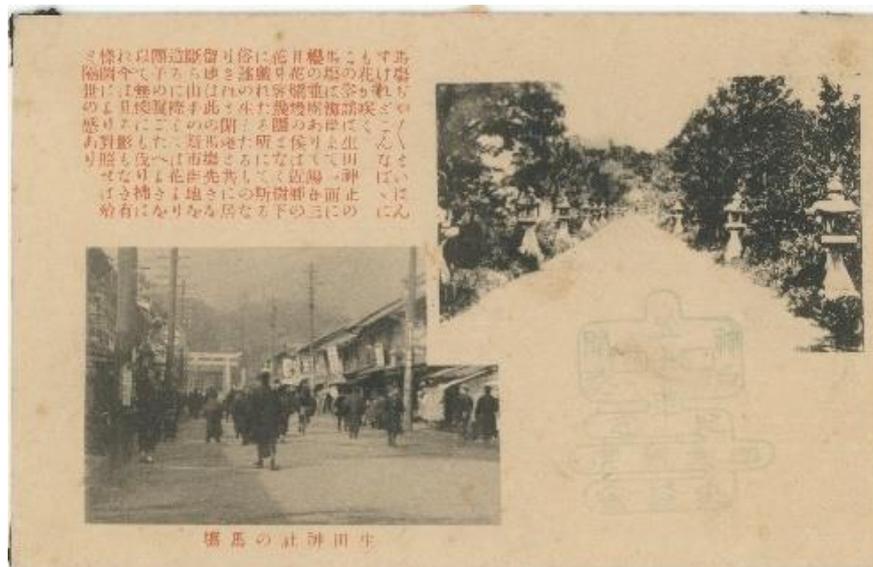


写真2 2025年時点の鳥居

また謡曲などでも当時をうかがい知ることができる。さらに、1635（寛永12）年の炎上からの再建、1945（昭和20）年の神戸大空襲による焼失からの復興や、1995（平成7）年の阪神・淡路大震災での大きな被害からも美しく再建された「甕りの社」としても知られている。

2-2 絵葉書に見る生田神社

No.202-20「生田の馬場」には、明治初期の生田の馬場が見える。当時は本殿より海岸まで800m余りの間、馬場が続いていた。浜辺には石鳥居と高燈籠がたち、灯台の役目をした。沖を通る船は帆をさげ生田の宮を通り過ぎる風習があったとされる⁵⁾。馬場の両側には桜並木があり、石灯籠が並び、桜花爛漫の光景は、桃源郷のようだったと伝えられている。「梅は岡本、桜は生田、松のよいのは湊川」と俗謡に謳われるほどの桜の名所だった⁶⁾。1868（慶応3）年神戸港の開港に伴い、馬場の一部は外国人居留地へと変化した。そして、周辺の都市化が急速に進んだこともあり、馬場の面影は明治年間のうちに消えてしまった。絵葉書左上の文面には、生田の馬場が時代に翻弄された様子がつづられている。



「馬場ぢや馬場ぢやといはんすけれどこなば、にも花が咲く この俗謡は生田神社の馬場は海岸まで一面に桜の並樹ありて陽春三月花爛漫の候は近郷の花見客幾團となく樹下に戯れたる所にて斯る俗謡の生したるものなりされと開港と共に居留地は此の馬場先きを断ち山手の新市街地を造るに際しては花より團子の腹ごたへよきを以て無惨にも伐り拂はれ今は見る影もなき有様圖により対照せは殆と隔世の感あり」（No.202-20）

No.60-9「IKUTA TEMPLE, KOBE」

生田神社は1896（明治29）年に「官幣中社」となった。しかし、No.60-9の絵葉書にはその社格を示す社標が確認できないことから、1895（明治28）年以前の景観と考えられる。葉書の右端には「前略御免 初航海門司安着三四日之内帰阪」と記され、門司から大阪に送られた葉書とわかる。葉書の左下に「IKUTA TEMPLE, KOBE」と英字表記がされ、外国人参拝者も訪れていたのだろう。



No. 60-17 「官幣中社 生田神社 表門前」

「官幣中社 生田神社」の石柱が見られることから、1896（明治29）年以降の発行と特定できる。鳥居手前に確認できる藤棚は現在の境内には存在しない。葉書中央の参拝印には「官幣中社・生田神社 参拝之章」とあり、社紋の桜がデザインされている。



「官幣中社生田神社」にみる焼失前の社殿

1943（昭和18）年4月の御例祭に合わせて発行された、6枚1セットの絵葉書が残されている（109-1～6）。生田神社略記とともに、桜の社紋が型押しされた袋に納められている。この発行からわずか2年後、1945（昭和20）年の神戸大空襲により社殿すべてが焼失しており、焼失前の姿が残された貴重な絵葉書といえる。



（上）No. 109-1 「官幣中社生田神社 表門」

（下）No.63-47 「神戸名所 官幣中社生田神社」

No. 109-1 「官幣中社生田神社 表門」

焼失後、社殿は1959（昭和34）年に復興されたが、『生田神社復興造営誌』（生田神社復興奉賛会、1959年）では表門としての建築物は確認できない⁷⁾。1974（昭和49）年に楼門が造営されており、表門は再建されなかったと思われる。石造の鳥居は唯一焼失を免れた。手彩色絵葉書では、藤棚の葉が青々と茂っている夏の風景が確認できる（63-47）。日本の風物や文化が写された手彩色絵葉書は、開港後日本文化に触れた外国人の間で流行した⁸⁾。



No.109-2 「官幣中社生田神社 本殿並拝殿」

かつての拝殿の姿であるが、焼失後再建された拝殿は「拝殿並脇拝殿」として建築規模が大きくなった。



No.109-3 「官幣中社生田神社 行宮所」

行宮所は『生田神社復興造営誌』（生田神社復興奉賛会、1959年）に確認できず、

戦災から再建されなかったことがわかる。

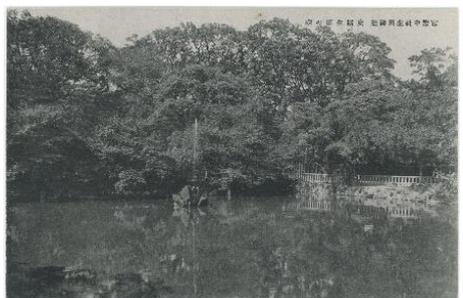
No.109-4 「官幣中社生田神社 ^{えびら} 籠の梅」

源平一の谷合戦の時、生田の森で平家方に囲まれた梶原景季が、咲きほこった梅の一枝を籠（矢を入れる武具）に挿して戦ったことが武士の風流として語り継がれている。源平盛衰記では、「駆くれば花は散りけれども、匂いは袖にぞ残りける。」と風情ある表現で記されている。今も生田神社境内には、紅白二株の老梅があり「籠の梅」と呼ばれている。



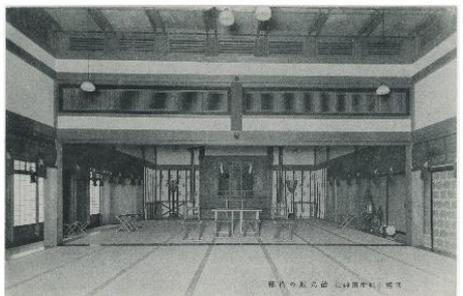
No.109-5 「官幣中社生田神社 史跡生田の森」

古代、旧生田川の西側は大森林であったという。生田の森は都にもその名が知られており、清少納言の「枕草子」をはじめ、生田の森を歌枕とした作品も多く残されている。中世には合戦の舞台となり、またその後は戦火や震災にも見舞われてきた。しかし、現在も社殿の北側にある生田の森では推定樹齢600年とも800年とも言われる楠の巨木が生い茂り、かつての面影が残る。



No.109-6 「官幣中社生田神社 儀式殿の内部」

焼失後、儀式殿は生田の池のほとりに再建された。結婚式なども執り行われる場所である。神戸大空襲で焼失した社殿は、1959（昭和34）年に造営復興したものの、1995（平成7）年に阪神・淡路大震災が再び社殿を襲った。空襲後に唯一残っていた石の鳥居も倒壊した大きな被害からの復興は、最先端の構造技術と伝統工芸の融合によりわずか1年後の1996（平成8）年に再建された。鳥居は伊勢神宮ゆかりのものが使われた。



2-3 生田の森と競馬場

かつて生田神社の東側に、横浜根岸に次いで 2 番目の古さとなる競馬場が存在した。1868（明治元）年のクリスマスに外国人による初めての競馬会が催されており、その後 1869（明治 2）年に外国人の競馬クラブができ競馬場が設けられた。1872（明治 5）年 10 月には 3 日間にわたり競馬が催されるが、1874（明治 7）年 11 月で競馬場は幕を閉じることとなる。鉄道の開通や人力車の普及、借地料などが理由とされる。

3 湊川神社について

3-1 湊川神社の歴史

湊川神社は、1336（延元元）年湊川の戦いで戦没した楠木正成公を御祭神とし、1872（明治 5）年に創建され「別格官幣社」に列せられている。殉節から約 300 年の間、どのように塚が守られてきたかは詳らかになっていないが、太閤検地によって文禄年間（1592～1596 年）に楠木正成公の墓所であることが明らかとなる。1650（慶安 3）年に尼崎城主 青山幸利氏による修営と五輪塔の建立、また 1692（元禄 5）年には水戸黄門で知られる徳川光圀公により墓碑が建立された。光圀公は大日本史編さんのため、1657（明暦 3）年から各地の調査と資料の収集をした。1692（元禄 5）年の佐々介三郎（助さん）による湊川の調査では楠公史跡と小さな墓所を確認しており、光圀公が墓碑の建立を決めた一因とされている⁹⁾。

1972（明治 5）年には、明治天皇の命により創祀・創建となった。天皇への忠義に殉じた正成公を祀る神社を創建することは、新政府の存立基盤を強固にするためだったとも言われている¹⁰⁾。政府は、1871（明治 4）年に造営事業全般を兵庫県に委任しており、神社は住民の勤労奉仕で創建された。神社境内となる水田に砂を運ぶ「砂持ち」行事が近村の人たちによって行われ、その埋立てには湊川川床の砂が使われたとの記録が残る¹¹⁾。それによると創建後の 1873（明治 6）年には境内での建屋営業が認められており、ぜんざい・蒲鉾屋・仕立屋・竹細工、寄席や芝居小屋が賑わっていた様子もうかがえる。地元では「楠公さん」の愛称で親しまれている。

3-2 絵葉書に見る湊川神社

No.170-3「神戸 別格官幣社湊川神社の大鳥居（日本一）」と No.168-9「神戸名所 別格官幣社湊川神社」には、大鳥居が見られる。これは、1937（昭和 12）年 12 月に建立され、翌 1938（昭和 13）年 8 月に崩壊、わずか 8 か月間だけ存在した。表門の前に建立された大鳥居は、楠木正成公の血脈と伝わる山下太郎氏に寄進されており、高さ四丈四寸五分（約 12m）は、石鳥居として無比の大きさだと称されている。

また、『湊川神社六十年史 本篇』（藤巻正之、1939 年）には「図らずも、翌 13 年 8 月、神戸地方大水害直後崩壊を見たので一応撤去、目下良材をえらび再建の準備を進めつつあり、再び御社頭に大鳥居の偉観を仰ぐの日近きにある」と記



(上) No.170-3

(下) No.168-9

されている¹²⁾。現在表門前に鳥居はなく、崩壊した大鳥居の一部が社号標となり残されている。

No.72-4 「湊川神社・神戸市役所」

1930(昭和5)年に神戸市役所が発行した観艦式記念絵葉書である。神戸港で観艦式が行われるのは、1890(明治23)年を初回とし4度目で、艦艇161隻の参加があったという。この観艦式を記念して神戸市は開港博覧会を開催しており、150万人の観衆が訪れた¹³⁾。「昭和五年特別大演習観艦式 昭和5年10月26日」の記念スタンプが押されている。



No.114-3 「別格官幣社湊川神社 御社殿全景」

No.114-1~6は6枚1セットで袋に収められている。

湊川神社の社殿は1934(昭和9)年の大改修後、1945(昭和20)年の神戸大空襲で焼失した。絵葉書には空襲に遭う前の姿が残る。焼失した社殿は、1952(昭和27)年に鉄筋コンクリート造りで再建されており、1995(平成7)年の阪神・淡路大震災では大きな被害を免れた。権現造りに似た神社建築様式となっている¹⁴⁾。



No.174-3 「神戸湊川神社 大楠公石碑 徳川光圀卿建設」

No.114-1 「別格官幣社湊川神社 御墓所」

また、No.174-3に見られるように、1692(元禄5)年に水戸光圀公の自筆による「嗚呼忠臣楠子之墓」の墓碑を建立、裏面には明の遺臣 朱舜水の正成公を讃える文が刻まれている。

1920(大正9)年の神戸市都市計画では、墓所(No.114-1)の区域に当たる神社東南角地を切取る案が出たが、神社側の反対意見具申により撤回された¹⁵⁾。



No.114-2 「別格官幣社湊川神社 御殉節遺跡」

1336(延元元)年、足利尊氏の大軍と激戦となったが衆寡敵せずと判断し、弟の正季卿と共に自決した場所とされる。本殿の北西に位置しており、境内の中で最も高所で樹木が繁茂するこの場所は「尊厳な地」とされる¹⁶⁾。また1937(昭和12)年の大改修の際に、拝殿の西側に新たに拝所を設け遙拝できるように一新された。



No.114-4 「別格官幣社湊川神社 拝殿」

『湊川神社六十年史 本篇』には、1939(昭和14)年4月の主要建造物に「拝殿」の記載が見られる。空襲による焼失以前は拝殿として独立した建造物があったことの記録であり、絵葉書はその姿を留めているといえる。再建された社殿は、本殿と拝殿が大屋根で覆われ一つの建造物となっており、現在は拝殿としての独立した建造物は見られない。



No.114-5 「別格官幣社湊川神社 正門」

1934(昭和9)年の大改修において、建造物の大部分が一新されたが、正門は創建当初の面影を残したままとなっていた。1942(昭和17)年、楠木同族会長 山下太郎氏により正門が新築寄進されており、絵葉書に写るのは寄進された正門と推察される¹⁷⁾。



No.114-6 「別格官幣社湊川神社 祝詞舎中門」

『湊川神社六十年史 本篇』では、1921(大正10)年6月に記された社殿その他建造物群に「祝詞舎中門」の記載は見られないが、1934年発行の『別格官幣社 湊川神社 御改修記念写真帖』では「祝詞舎中門」の姿が確認され、1935(大正10)年以降に造営されたことがわかる¹⁸⁾。

祝詞舎中門は本殿と拝殿の間に配置されたが、焼失後の再建では本殿と拝殿が一つの建造物になったため再建されなかったと考えられる。絵葉書は焼失前の姿を残している。



3-3 楠公さんの水族館

かつて、湊川神社の境内には水族館があった。神戸市には、歴史的にいくつもの水族館が設けられ、場所も移り変わってきた(表1)。

表1 神戸市内の水族館の移り変わり

名称	年代	場所	関連事項
和田岬水族放養場	1895（明治28）年	和田岬遊園地 「和楽園」	第4回内国勸業博覧会
和田岬水族館	1897（明治30）年	和楽園	第2回大日本水産博覧会、 日本初の水族館
「楠公さんの水族館」 （写真3）	1902（明治35）年～ 1910（明治43）年	湊川神社境内	和田岬水族館を移築
湊川水族館 （No.196-14）	1930（昭和5）年～ 1943（昭和18）年	湊川公園	観艦式記念神戸海港博覧会、 神戸市水産会の開設
神戸市立須磨水族館	1957（昭和32）年～	須磨区若宮町	
神戸市立須磨海浜水族園	1987（昭和62）年～ 2023（令和5）年	須磨区若宮町	須磨水族館のリニューアル
神戸須磨シーワールド	2024（令和6）年～	須磨区若宮町	水族館の民営化

湊川神社境内にあった、「楠公さんの水族館」は、1897（明治30）年の第2回大日本水産博覧会で設置された和田岬水族館を移築して生まれた。博覧会にあわせて開設した和田岬水族館は日本初の水族館であったが、来館者にとって地理的に不便であったために、博覧会終了後、移転建築の計画地を湊川神社境内に求めたという¹⁹⁾。水族館は、外壁にアーチがデザインされた洋風の建築になっていた（写真3）。館内は大小14からなる魚類の水槽があり、中央スペースには2つのジオラマが設置されていたとの記録がある²⁰⁾。立地は現在の宝物館が建つあたりとされ、約8年間市民に親しまれたが、経営が困難になったことを理由に、1910（明治43）年2月に閉館した。

No.196-14は「湊川水族館」の场景を伝える絵葉書である。湊川水族館は、1930（昭和5）年に開催された神戸海港博覧会にあわせて、神戸市水産会によって湊川公園に開設されたもので、水族館と海洋館に分かれていた。



写真3 楠公さんの水族館
（荒尾親成『ふるさとの思い出写真集
明治大正昭和 神戸』1979年、P.9）



No.196-14「湊川水族館」
（「神戸沖観艦式記念海港博覧会」神戸市文書館所蔵）

4.おわりに

生田神社の歴史は古く、創始については日本書紀にも記されている。砂山から現在の地に移ったころの生田の森は、清少納言の「枕草子」や和歌の題材となり、また古戦場であることを伝える物語や謡曲など、多くの文学作品が残されている。社殿の北側にある生田の森には今でも楠の巨木が生い茂り、かつての面影を残す。

湊川神社の創建は明治に入ってからになる。正成公を祀る神社を創建することは、新政府の基盤を強固にするためだったとも言われている。創建後の境内では、多くの店や芝居小屋が立ち並び賑わいをみせていた。観艦式の地に湊川が選ばれたことや水族館の移築、また境内の砂持ち行事や建屋営業など、行政や近隣住人との関りが深い。

生田神社・湊川神社は異なる歴史と意義を持つ。時代の流れに沿い、また戦災や震災からの復興を遂げてきた両社は、現在も神戸を代表する名所として多くの参拝者が訪れている。

注

- 1) 和歌山大学紀州経済史文化史研究所『絵葉書 そのメディア性と記録性』和歌山大学紀州経済史文化史研究所、2013年
- 2) 太田徹三『葦合文化の源泉 布引瀧と周辺史跡』葦合史蹟頒布の会、1952年
- 3) 兵庫県治山林道協会『六甲山災害史』兵庫県治山林道協会、1998年
- 4) 葦合区役所広報相談課編『葦合ものがたりー郷土のおいたちー』葦合区役所、1977年。なお、この伝承は諸説ある。
- 5) 生田区振興連絡協議会『生田のいまむかし』生田区振興連絡協議会、1975年
- 6) 生田神社編『生田神社史』国書刊行会、2007年
- 7) 生田神社復興奉賛会編『生田神社復興造営誌』生田神社々務所、1959年
- 8) 水嶋彩乃ほか編『Colorful JAPAN 幕末・明治 手彩色写真への旅』神戸市立博物館、2024年
- 9) 楠本利夫「『湊川神社物語』湊川神社から見た神戸の近現代」湊川神社、2011年
- 10) 同前
- 11) 西山幸夫「湊川神社境内変遷の記」『歴史と神戸』14号、神戸史学会、1964年
- 12) 藤巻正之編『湊川神社六十年史』湊川神社、1939年
- 13) 神戸博覧会協会編『観艦式記念 海港博覧会誌』神戸博覧会協会、1931年
- 14) 湊川神社「神戸と楠公さん」編集委員会編『神戸と楠公さん』神戸新聞総合出版センター、2006年
- 15) 注12に同じ
- 16) 同前
- 17) 森田康之助『湊川神社史 下巻 鎮座篇』湊川神社社務所、1987年
- 18) 湊川神社『別格官幣社湊川神社御改修記念写真帖』湊川神社、1934年
- 19) 注11に同じ
- 20) 川辺賢武「神戸の水族館のうつりかわり」『歴史と神戸』14号、神戸史学会、1964年